

明石屋のいわれ 【馬瀬】

江戸時代のはじめのころ、明石のお殿様に子供がなくて將軍様の血筋である福井の殿様の息子さんが養子にこられることになりました。

この松平直明様は、飾り気のない、あっさりした方で、家来を五・六人つれて、福井から天の橋立をご覧になり、山道ばかりを馬に乗って「カッポン、カッポン」とかなり疲れて、この馬瀬で宿をとられました。

「わしは、海の魚など食べあきた。何か、もつとうまいものをたべさせろ。」

すると、宿の婆さんが手をもみながら、

「と、おっしゃいましたも、こんなものしか」

と、差し出しました。

「おう、これは何じゃ。坊主あたまの間の、ごはんつぶ一つ一つは、すじがついていではないか。」

「はい。こいものむぎがゆでございますだ。」

「ほう。あまくて、うまいのう。」

「うまい、うまい。お前たちもよばれるがよい。」

家来たちにもすすめ、おなかがいっぱいになったころ、宿の主がむすめにお茶と盆を持たせてきました。

盆のお皿には茶色に光っているものが二つのつていました。

「おやおや、主、これは何じゃ。見たこともない。」

「ほし柿をつぼの中でうませたものでございます。」

「ほうほう！ 柿といえは黄色い、かたいものかと思っていたが、こ

れはやわらかそうで、ピカピカ光っているではないか。」

「おおう！ これはうまい！」

「もう一つたべるぞ。うまい、うまい！」

舌つづみを打ちながら、

「世の中に、こんな不思議なたべものがあるとは知らなんだ。」

その晩は、ぐっすり休まりました。

あくる朝、目覚められますと、

「主よ、わしは明石の殿様じゃ。また、たべに寄るから、この宿の名は明石屋と名づけよ。」

殿様は庭に出て、夕べの柿の種を日当たりのよい庭先に埋められ、

「よく世話をするんだぞ。」

といって、五・六人の家来と共に明石へ向かって出発されました。

殿様は忙しいのか、それから一度も寄られることはありませんでしたが、その柿は日光をいっぱい吸って、庭の中で一日一日と大きくなってゆきました。

そして実をいっぱい付けましたが、元の大柿ではなく、小指の爪ほどの、小さく黒々と輝いた豆柿ばかりでありました。

それが毎年変わることなく、何百、何千と実を付けるさまは実に見事でありました。

このことが

「明石の殿様が明石屋に植えられた家内繁盛の印の豆柿を見たい。」
といって、遠くからでも寄ってくるので明石屋は一銘「豆柿屋」とも言われたということでもあります。

【馬瀬には、あかしや、はなや、たんばやの三軒の宿があった。京街道】